明治大学外国人研究者招聘制度　報告書

＜招聘教授・研究員の情報 / Guest Professor・Guest Scholar＞

氏　名 Name	王　立
所属機関(派遣元) Affiliation (Home Organization)	華東師範大学マルクス主義学院
現在の職名 Position	博士後研究員（ポスドク研究員）
招聘期間（日本への入国日から出国日） Invitation Period (from the date of entry to departure)	2024年12月 4日～2025年12月 3日
専攻 Field of Research	日中関係史、思想文化史
ホスト教員氏名と所属学部研究科等 Name of host teacher and affiliation at Meiji University	高田幸男　文学部

＜外国人研究者からの報告 / Foreign Researcher Report＞

①研究課題　/　Research Theme

第二次世界戦争の中国戦場における中国共産党の対日俘虜政策研究

②研究概要　/　Outline of Research

中国共産党（以下、中共）の捕虜政策に関する研究は、従来、制度史的、政策史的視点からのものが中心であったが、現在では、「思想」イデオロギー面からの考察に関心が移りつつある。日本人捕虜の問題は恥と敗北の象徴であり、また中共にとって日本人捕虜は、改造可能な政治的主体であった。日本においては近年、大沢武司『毛沢東の対日戦犯裁判』（中央公論新社、2016年）が、捕虜政策を国家戦略の一部、思想改造・政治宣伝の装置ととらえ、思想史中心の分析へ研究の傾向を転換させた。また吉田裕『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』（中央公論新社、2017年）が日本軍の精神主義・軍隊文化を分析し、捕虜の存在が軍事的倫理の破壊として扱われた理由を、軍事制度と精神構造として解明している。

先行研究を踏まえ、明治大学図書館、国会図書館等で、各種回想録、あるいは『日本人民反戦同盟資料』等を捜索した。

日本では捕虜は恥ととらえられ社会から排除され、戦後も長い沈黙を強いられているが、中共は日本人捕虜政策を思想改造の成功物語として国際世論戦や政治宣伝に用いた。今後の研究課題として、1. 捕虜の語りと思想改造のメカニズム、2. 日本人捕虜の記憶の表象と政治性、3. 反戦知識人と捕虜経験の交差点、4. イデオロギーの視点から抗戦期中共と国民党の対日兵士観の比較があげられる。これらをふまえ、帰国後の研究構想を、「捕虜のイデオロギー：抗日戦争期における中国共産党と国民党の日本人捕虜思想改造政策の比較研究」に改めた。

③招聘期間中の研究活動の実績　/　The research results as Guest Professor・Guest Scholar

明治大学図書館、国会図書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所において、随時、日本軍・日本人捕虜関係史料を収集する。
2025年3月14日、中国現代史研究会において「日中戦争時期における中国共産党の日本人捕虜政策」と題して報告をおこなう。
2025年11月12日、明治大学生田キャンパスの平和教育登戸研究所資料館を見学する。
2025年11月25日、明治大学大学院文学研究科高田ゼミにおいて「抗日戦争期捕虜政策研究の再検討」と題して、招聘研究期間の成果報告をおこなう。

明治大学平和教育登戸研究所資料館における調査・見学
（右から5人目が王立氏）

高田ゼミにおいて成果報告をおこなう王立氏（左）